

# あわゆず ふれず

第22号 2010年11月20日発行

伝えよう日本語を  
広げよう徳島から



J T M と く し ま  
日本語ネットワーク

## 外国にルーツを持つ子供たちへの支援

私が初めて外国人への日本語支援を知ったのは、20年ほど前のことです。最初は軽い気持ちで引き受けたのですが、とても大変なことだと感じました。日本語で日本語を説明してもなんにもならないというのがわたしの感想でした。それがきっかけとなり、日本語指導教育を受け、外国人に日本語を支援するJTMへ入会しました。

そのころ、JTMでは毎年、県の委託を受けて「夏休み子ども日本語教室」を開いていて、私も入会した2006年から参加しました。終わるたびに、「夏休みだけでなく、1年を通して子どものための日本語教室があったら」という声が多く寄せられていました。そこで、いろいろ議論を積み重ね、2009年3月に28日(土)29日(日)の2日間、教室を実施することができました。そして、毎月開いて欲しいという要望にこたえて、4月以降は、月末の日曜日の午後に開催することにし、県と市の教育委員会の後援もいただいて、2009年4月26日から月1回の子ども「にほんご寺子屋」が始まりました。

また、ちょうどJTMに入会したころ、中学校教師の友達から、日本へ来て1ヶ月ほどの中国から来た子どもが中学校へ入ってくるが、日本語の支援をしてもらえないかという依頼がありました。自分にできるだけのことをとの思いで週2回の取り出し授業を引き受けましたが、子どもへの支援は大人よりもっと大変でした。友達と話せるようになるまでが大変ですし、友達とは仲良く遊んでいるように見えても、授業の日本語はまた別物です。試行錯誤しながら日本語と教科の支援を6ヶ月ほど続けました。この二つの支援から、外国にルーツをもつ子どもたちにとって、生活するのに不便を感じることなく日本語を使えていても、学習するための日本語はまた違った難しさがあることや、同じような仲間がいることの大切さ、学校・家族以外の大人の支援者がいることの大切さを感じました。

2010年現在、JTM会員として、また地域に住む大人として、どうしたら子どもたちによりよい支援ができるかということを考えています。子どもたちの状況は様々です。「日本に何歳の時に来たのか。日本語習得にどのくらい時間をかけているか。母語はどうしているのか。家庭で、何語で話しているのか。学校での支援の



方法はどうかであるか。」といったことなど、知りたいこと、分かり合いたいことがいっぱいです。今後「にほんご寺子屋」で子どもたちがした学習や活動内容を学校にお知らせしたり、また学校からこんなことをしてほしいといったことなどをお聞きすることなどができれば、よりいっそう子どもの未来のためにできることがあるのではないかと考えています。(長町 順子)

# サマースクール「夏休み子ども日本語教室」

日時：2010年7月21日、22日、23日、28日、29日、30日（6日間） 10:30～12:00

参加者：小学生8名、中学生7名、高校生1名 計16名 スタッフ：18名

今年も県からの委託を受けて、「夏休み子ども日本語教室」が開かれました。日本滞在歴、国籍、年齢、家庭環境などが様々な子どもたちが集まりました。そして、スタッフもまた職業、年齢など様々な人が参加しました。そんなスタッフの感想の抜粋をいくつかご紹介します。

## スタッフの感想

サマースクールには年齢も状況も異なる子どもたちがやってきます。小学校中、高学年で来日した子どもは教科のことばにはとても苦労しています。日常会話にあまり問題がなくても教科のことばを理解するのはとても難しいことです。このような子どもたちの支援には学校現場との連携が欠かせないのではないかと今年のサマースクールが終わって強く感じています。なにはともあれ、彼らが日本の学校にうまく適応して、元気に2学期を迎えられるようにと念じています。（村松 幸子）



初日は小学校低学年の子どもたちを担当。指導し始めてまもなく、これは学校ではさぞ苦労しているだろうと思われました。一、二、三の漢字の練習では、一枚のおりがみ、一本の鉛筆、さとうを一さじという問題に「さとうってなに?」「さじってなに?」という具合で、漢字の学習をしながら、日本語の語彙も増やしていくわけですが、時間が短すぎると痛切に感じました。学校の教師、地域のボランティアや日本語教師などが連携をとり、長期的にサポートする体制が整えば、子どもが本来持っているすばらしい能力をもっともっと伸ばしていけるだろうに、サマースクールの期間は短すぎる、もっと何かできることはないかと、もどかしさを感じました。（竹内都美子）

今年初めて2日間参加した。子どもたちにとってわずか6日間の日本語教室であったが、多くの子どもたちが参加して、真剣に学ぶ姿に感動した。昨年まで中学教師として働いていた私にとって、日本語に苦労しながらがんばっている子どもたちがたくさんいることを知った。学校現場は多くの子どもたちを指導しているが、ここに来るような子どもたちには十分な支援ができていないようである。学校と十分な連携を図りながら、子どもたちの健やかな成長につなげていく必要を感じた。

（大坂 庄司）



## 2010年度JTMとくしま日本語ネットワーク 第1回特別研修会

## 「運用を中心とした日本語教育 —大学の場合、地域教室の場合—」に参加して

日時：2010年8月7日（土） 15：30～17：00 場所：徳島県国際交流プラザ（トピア）大会議室

8月7日、講師に徳島大学国際センターの大石寧子教授を迎え、「基本的には大学と地域の教室においてあまり差はないと考えています。」と言う先生の言葉から研修は始まった。

徳島大学で行われている、約6ヶ月の集中講義型の「日本語研修コース」での指導の様子を紹介して下さった。このクラスでは4、5人の講師がチームを組み教えている。情報をシェアする事がとても重要で引継ぎ、日報、立ち話などで学生たちのプライベートな情報も交換するそうだ。例えば、「国にいる子どもが熱を出した」「ホームシックになって寝られない」「たばこが大好き」などの学生たちとの雑談で得た個人的なことである。

わたしが今回の研修で一番学んだことである「インパクトのある導入」に必要なことが、この「学習者に関する情報」なのだ。インパクトのある導入とは、例えば、「～たい（食べたい・話したい）」を教えるときの導入で、学生から得た、「国にいる子どもが熱を出した」と言う学生に、「〇〇さん、子どもさん大丈夫ですか」と聞く。すると「もう大丈夫…」と返事がある。「そうですか。写真はありますか」と聞いてみる。そして「いつ、子どもさんに会いましたか。」と言う問いに「〇〇です…」と答える。ここまでのやり取りで学生は「子どもに会いたい」と言う気持ちを強く感じ、母語では「会いたい」という言葉が頭に浮かんでいる。このように追い込み、その気持ちを実感させて導入することにより初めて「～たい」が使えるようになる。それをただ「食べます→食べたいです」と変換練習をしたのでは使えるようにはならないと他の例も出して具体的に教えて下さった。

後半では、地域の教室でゼロレベルの初級の学習者でも楽しみながら基本文型が身につく本、「にほんごこれだけ！」の紹介があり、わたしを含め出席した多くの方が研修後に購入していた。従来の初級の本より、文型・語彙が厳選されており量が少なく、学習者にとって負担が軽減されて使いやすそうだ。

JTMもプライベートレッスン以外は、すべてチームで教えているので、「学習者の情報のシェア」「それを使ってインパクトのある導入」と、とても勉強になった。ぜひ、実践してみたい。（玉置 房）



## 2010年度JTMとくしま日本語ネットワーク 第2回特別研修会

## いっしょに考えよう！わたしたちにできること ～日本語指導・支援の現場から～

日時：2010年8月8日（日） 13：30～16：00 場所：徳島県国際交流プラザ（トピア）大会議室

2009年度から実施している外国人のための「介護の日本語講座」や「就職のための日本語講座」の中で、受講生から生活や仕事・子どもに関する様々な思いや悩みが出されるようになりました。このような問題をより多くの人たちといっしょに考えようと、会員や外国の人たちが参加して、交流会を行いました。

一番初めて出てきたことは日本語がうまく話せない、漢字が難しいということです。日本語を勉強する時間が十分に取れないという悩みや5年以上日本で暮らしていても書くことは難しいという話も出ました。外国の人たちにとって、日本語の習得は生活の質に直結する大事なものであり、切実な問題です。このような日本語の問題に関しては、JTMで行っている「日本語サロン」や子どものための「にほんご寺子屋」の紹介をしました。その他の問題として、阿波弁がわからない、日本人との付き合い方がよくわからなくて悩んでいるなどの意見も出ました。

アンケートの声として、会員から「少人数のグループであれば、もっと自由に話せて、具体的なことが出てきたのではないかな。」など、外国の人からは「いろいろな情報が得られてよかった。今日の話聞いたおかげで、今まで感じていた不安がなくなると思う。」などがありました。

JTMの会員になりたいと何人かが希望しています。今回の交流会は、同じ地域に住む人間として、またJTMの仲間として、日本人・外国人の区別なくいっしょにできることを考える第一歩となるのではないでしょうか。（村松 幸子）



## 「就職のための日本語講座」2年目の取り組み

と き 2010年5月17日～7月9日 月～金曜日 9:30～12:30 総学習時間120時間  
と ころ ヒューマンわーくびあ徳島(徳島市昭和町3丁目35-1)  
受 講 生 13名(中国、フィリピン、ロシア、コロンビア、セルビア)  
主 催 社団法人徳島県労働者福祉協議会 協 力 JTMとくしま日本語ネットワーク

本講座では職場で通用する日本語の習得はもちろん、お辞儀の仕方や身だしなみ、名刺交換、電話での対応など、ビジネスマナーの習得も目標としています。また、「決まりを守る」「礼節を重んじる」ということも大切に考え受講生に働きかけています。欠席や遅刻も少なく、授業開始の5分前には全員が着席し、9時30分きっかりに「起立、礼『お願いします』、着席」の声が教室に響いています。

講師も昨年の経験をもとに、動作とともに発話する練習を多く取り入れる、レベル差に対応するため、画像やレアリアを多く準備して理解を促す、初級文法の復習を随時取り入れるなど、工夫を凝らしながら指導を進めました。



その他に、講座で取り組んだことをご紹介します。

### あゆみ

受講生は毎回の授業で学習したことや感想、日々の思いを『あゆみ』に綴り、スタッフが返事を書いてやりとりしました。スタッフとのコミュニケーションと書き言葉の習得を目的としています。

### 個人面談

中間期に、講座への感想や要望、日本語習得の自己分析、今後の短期・中長期的な目標等を聞き取るために面談を行いました。この講座に出会えたことで、目標が持てるようになった、前向きにものごとが考えられるようになったという声が複数の受講生からあがりました。就職のための日本語講座が受講生の胸のうちにしまっていた、働きたい、社会のために役に立ちたいという思いをこれまでより外に引き出したのだと感じました。

### 宿題とワンポイントレッスン

レベル差があり、初級文法を理解していない人も少なくなかったため、1日おきに初級文法のテーマに沿った5～7ページ分の宿題を出しました。宿題は講師が採点し、誤答の一覧を作成・分析し、それをもとに授業のあと、誤答が多かったテーマについて5分間のワンポイントレッスンを行いました。『は』と『が』や動詞のグループ分け、自動詞と他動詞、授受表現などを取り上げました。

### ビジネスマナー講座

講座終了後には、専門の講師を招いてビジネスマナー講座を開き、面接の応答や立ち居振る舞いについて研修を受けました。履歴書の渡し方やノックの仕方、椅子の引き方など、一つひとつの動作は受講生にとって驚きの連続のようでした。「マナーは相手のことを思うことだとわかりました」「前に面接を受けたけれど、採用されなかった理由がわかりました。これから練習して自信を持って面接を受けられるようになりたい」など、事後の感想からも就職に向けて多くの学びを得たことが伝わってきました。

受講生のうち5人は、9月からスタートした「介護の日本語講座」(総学習時間120時間)を受講しています。英会話学校に就職が決まった人もいます。また、留学生試験をめざしていた受講生も2度目の挑戦で合格を果たし大学受験に向けて挑戦を続けています。



皆でがんばってることができたこのクラスはひとつの家族のようだった…修了式でそう話してくれた受講生のことばが今も心に残っています。受講生の皆さんは困難にあってもあきらめず、これからも努力を続けることでしょう。ここで生まれた絆を、就労支援の取り組みをとおして、これからは地域の人たちとともに育み深めていきたいと願っています。

(兼松 文子)

# セネガルの大地より

夕暮れが好きだった。大きな太陽がアフリカの空をオレンジ色に染めた。バオバブのシルエットが姿を現し始めると、その上空には一番星が輝いた。村の女性達が夜ご飯の支度を始める。食器の音。子どもたちの談笑。家畜の鳴き声。村全体が奏でる優しいハーモニーを聴きながら飲む一杯のビール。

**あの瞬間、僕は確実に満たされていた。**

青年海外協力隊員として、西アフリカ・セネガル共和国で2年間を過ごし、今年の3月末に日本へ帰国した僕は、現在日本で夕暮れさえも見る事のない生活を送っている。それでも、一日の終わりに一杯のビールを飲むことは変わっていない。日本のビールを味わいながら、この場をかりて、セネガルでの生活を思い出したい。



「ないもの」をあげたらきりが無い。電気は不安定。水道はない。医療の質も低い。気温は日中40℃を超えることが当たり前の世界だが、もちろんクーラーなどない。暑さで眠れないこともある。野菜が村からなくなる時期もあるし、ましてや日本食など食べられるはずがない。それでも僕はセネガルが大好きだ。それはここにしかないモノが確実にあるからなんだろう。

「ご飯を食べにこいよ！」お昼時に村を歩いていると、至る所でこんな風に昼食にさそわれる。知っている人も知らない人も共にご飯を食べる。旅先で店に入っていると、店番の人と一緒に昼食になることなども日常茶飯事。僕自身も二年間で一人でご飯を食べたことなど数えるぐらいしかない。ご飯が終わると、2～3時間もかけて、おしゃべりをしながらお茶を飲む。セネガルでは、一緒にご飯を食べることで、「分け合うこと」と「団結すること」を体感するのだ。

病気をしたときなどは、家族みんなで助け合うのが当たり前。僕も知り合いのセネガル人や同任地の日本人に何度助けってもらったことか。医療のレベルやアクセスを考えると、重度の病気には首都まで上がらなくてはならない。そのリスクを考えると、村では助け合うことが生きていく上での術なのだ。

**人は一人では生きていけない。**

それを実感することのできるのがセネガル社会だ。経済や医療が発達したこの日本でもそれは同じことだと思う。いかなるときも、人間は問題を抱えているものだし、それを解消するために知恵を出し合わなければならない。アフリカの大地はそんなことを僕に教えてくれたのだった。

(木下 恭亮)





# 海外だより

## ● ● ● ● ● チャレンジド 浅野 高弘 ● ● ● ● ●

私は今年の4月からアメリカ・カリフォルニア州・バークレー市で障害福祉の勉強をしています。バークレーはサンフランシスコ湾東岸にある丘陵地帯です。街の中心にカリフォルニア大学の本校バークレー校（通称Ca1）があります。140万坪以上の広大な敷地があり、生徒数も約3万5千人いるそうです。世界中から人が集まるインターナショナルの街で、Ca1を中心に街が動いていると言っても過言ではありません。私の研修先のバークレーCILは38年前に世界で最初に障害者が始めた自立支援センターで、ここから全米に広がり、世界にも広がっています。ここで学んだ多くの日本人が少なからず現在の日本のバリアフリー社会に変えてきたのだと思いました。



CIL職員の誕生日パーティーの写真

こちらに来た当初は坂道が多い街なので車イスでの自走がたいへんでしたが、バスの障害者用の乗車カード（月額20ドル）を使うようになってからはどこにでも気軽に出掛けるようになりました。バークレーや隣町のオークランドを走るすべてのバスが車イスに対応し、スロープもしくはリフト付きです。電車に乗る際も段差がなく一人で自由に乗り降りが可能です。トイレも広く作られている所が多く、車イスで入れないトイレの方が少ないです。



サンフランシスコでバスに乗っている写真

私のアメリカの知人にはいませんが、戦争で負傷し障害を持ってしまった人も大勢いると聞きます。アメリカ人は障害者に対して理解を持ってくれている人がすごく多いと感じました。道を歩いていても多くの人が車イスの私を優先してくれます。徳島の街中で車イスの人を見かけることはバークレーに比べると少ないです。少数の車イス利用者のために現存しているものを変えるということは色々な面で問題があり難しいことだと思います。先日横断歩道の信号待ちをしていると、私よりも若そうな女性が笑顔で「押しましようか。」と言って押ししてくれました。誰もが心のバリアフリーを持つ事はそんなに難しい事ではないと思いました。



サンフランシスコ湾のランニングコースをハンドサイクルで走った時の写真

また、先日は横断歩道の信号待ちをしていると、私よりも若そうな女性が笑顔で「押しましようか。」と言って押ししてくれました。誰もが心のバリアフリーを持つ事はそんなに難しい事ではないと思いました。





## ● ● ● ● ● チェンマイの風 西谷 功 ● ● ● ● ●

北部タイでは9大学が日本語プログラムを持っており、高校では第二外国語として選択科目になっています。ここチェンマイには国際交流基金から専門員が派遣されていることもあり、市内の高校の多くが日本語教室を設けています。

チェンマイはバンコックから北へ700キロの所、北部の薔薇と言われ、その昔はランナー王国の首都でした。この人は自分たちのことを誇りを持って「コムアン」（北タイの平地に住むタイ族）と呼びます。多民族の入り交じる場所ですから「自分たちの文化は意識的に守るもの」という考えをはっきり示し、ランナーの文化を子どもたちに教えます。タイ語だけでなく「ガムムアン」というチェンマイ語も教え、金曜日は「ランナーの日」として学校の制服が替わります。いつもは白いブラウスにブルーの



スカート、長い髪をポニーテールのように白いリボンで結んだ女の子も金曜日はパーシンと言う伝統的な巻きスカートになります。男の子の服はモーホームと言います。廊下で一年生がワイ<sup>注</sup>（タイ風の挨拶）をして通り過ぎようとしたのをつかまえて写真を撮りました。

もう一枚は3年生です。パーシンの色が違います。この子はちょっと緊張していますね。実は期末テストをしているところで、自分の家族について日本語で200字ほどの作文を書いて、クラスの前で発表しているところです。

では日本のことをお考え下さい。若い人達は和服を自分で行うことができません。着物をたたむこともできません。帯揚げ、帯締め、帯板と言っても何のことか解りません。日本の文化は継承されていくのでしょうか。国際交流が盛んになるに従って、日本人も自分たちの文化を意識的に守る工夫が必要かもしれません。

チェンマイは自然が豊かに残っています。最後に動物とのふれあいの写真をお見せして今回の便りを締めましょう。虎の成獣とのスキンシップです。昔「虎の尾を踏む男たち」という映画がありましたね。皆さんもトライしてみませんか。



(注 ワイ：タイ風の挨拶で頭を下げずに、神仏を拝むときのように両手を合わせて敬意を表す。)



# INFORMATION

## 活動紹介

ブラッシュアップのために

◇日本語指導勉強会 毎月第2土曜日  
〈模擬授業と意見交換〉  
日本語に関心のある方ならどなたでも参加  
できます。

◇教師グループ研修会  
毎月第3金曜日または土曜日

◇定例会  
◇特別研修会

日本語学習をサポートする交流活動

◇日本語サロン  
\*毎週月曜日10:30~12:00  
徳島県国際交流プラザ

外国にルーツを持つ子どもたちの「にほんご寺子屋」

\*毎月第4日曜日13:30~15:00  
徳島県国際交流プラザ

就職のための日本語講座

\*5月17日(月)~7月9日(金)

介護のための日本語講座

\*9月2日(木)~11月2日(火)

ヒューマンわーくびあ徳島

主催 (社)徳島県労働者福祉協議会

アパレル日本語集合研修

\*10月18日(月)~11月15日(月)

## 日本語レッスン

◇プライベートレッスン・グループレッスン  
初級会話から日本語能力試験対策レッスンなど  
ニーズにあった学習プランで教えます。

◇外国人技能実習生の日本語集合研修

◇詳しくは事務局またはレッスン専用メール  
jmtoku-lesson@mbk.nifty.com まで。

◆会員数(2010年度) 正会員42名 協力会員6名 協力団体2

◆入会随時受付中!

正会員...会の活動に参加し、ともに運営を行います。  
協力会員・団体...会の活動を支援する個人または団体

## JTMとくしまのオリジナル教材紹介

Konnichiwa Tokushima

# こんにちは とくしま

徳島で日本語を学ぶ人のために

本書は初級学習者向けの教材です。

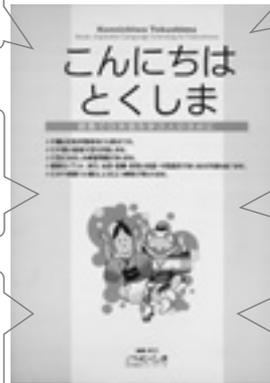
日本語の基礎文型を学習します。

文型に対応した練習問題があります。

イラストがたくさんあり、わかりやすいです。

日本や徳島の暮らしに役立つ情報が得られます。

会話と語彙、表現の英語・中国語訳があり、自習学習を助けます。



●ご購入、お問い合わせは...

JTMとくしま事務局 または

☎ 紀伊国屋(そごう徳島店8F)

☎ 宮協書店(クレメントプラザ4F)

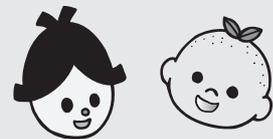
## 助成金をいただきました

四国労働金庫社会貢献活動「助成金」をいただきました。

活動に対してご理解とご支援をいただいたことに感謝し、

誰もが社会とのつながりを感じられるようなチャレンジ

ができる地域づくりに取り組んでいきたいと思ひます。



## あ と が き

暑く長かった夏のあと、心地よい秋は足早に去り、肌寒さを覚える頃となりました。「あわゆずぶれす」22号ができました。

どうぞお読みになって、ご意見ご感想をお寄せいただければ幸いです。(山満十糸子)

発行/ J T M とくしま日本語ネットワーク

発行責任者/ 兼松 文子

編集責任者/ 山満十糸子

編集スタッフ/ 加村 匡子・村松 幸子・辻 暁子・安山 政子・

長町 順子・玉置 房・森 清・竹治 博・

伊達 詩麻・杜 美智

印刷/ 徳島県教育印刷(株)

■ J T M とくしま日本語ネットワーク

〒770-0942 徳島市昭和町3丁目35-1

わーくびあ徳島2階 (社)徳島県労働者福祉協議会内

TEL 088-625-8387 FAX 625-5113

E-mail jmtoku@nifty.com

URL http://homepage2.nifty.com/jmtoku/